

令和4年1月24日（月）～令和4年2月4日（金）

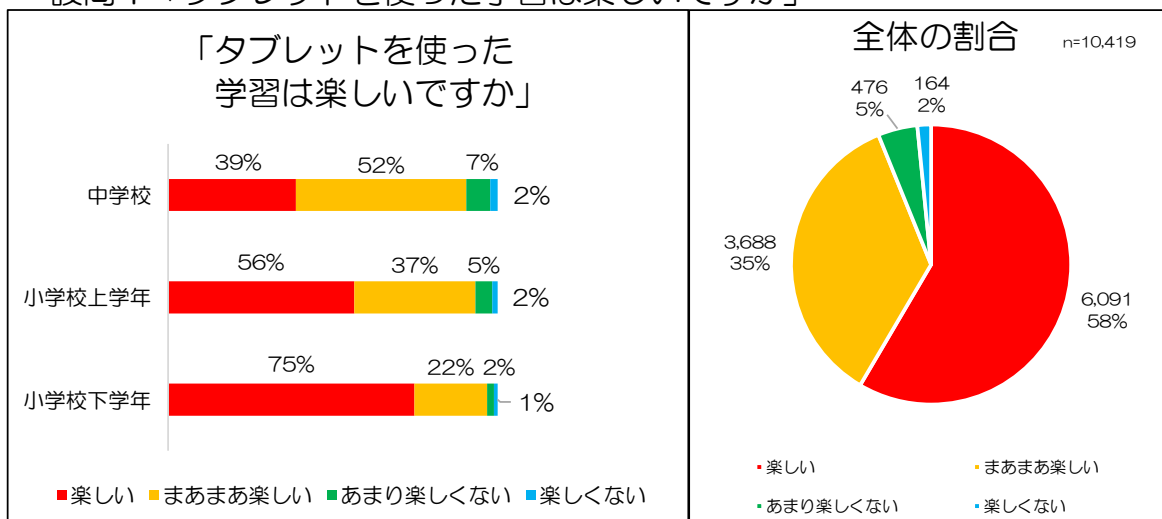
児童生徒、保護者の「タブレットについてのアンケート」の結果報告

本年度より始まった一人一台タブレット端末の運用の実態について市内全小・中学校にアンケート調査を行い、現状の把握を行った。本調査では、タブレットを学校現場に導入したことによる学習効果や、タブレットの持ち帰りについての実態、保護者の関心などを中心に質問した。これを受け、次年度以降の取組に対して生かすことができる成果と課題を精査し、新たな目標点の設定の参考にしていく。

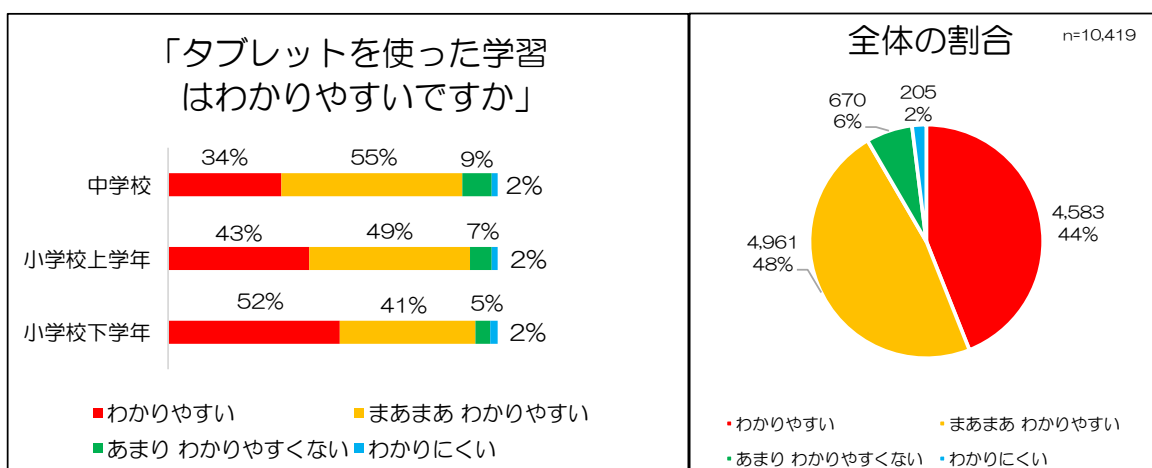
アンケート対象	回答数	市内児童生徒数	回答割合
小学校下学年	3,842	4,540	85%
小学校上学年	3,758	4,562	82%
中学校	2,819	4,073	69%

1. タブレットのもたらす学習意欲の向上と学習効果について

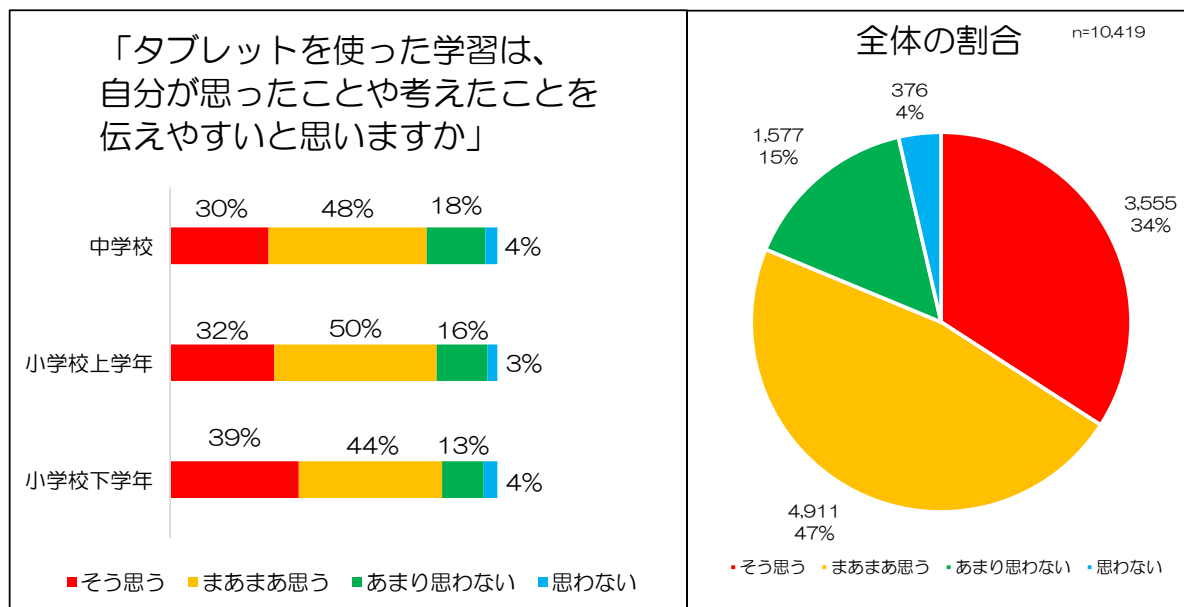
設問1 「タブレットを使った学習は楽しいですか」



設問2 「タブレットを使った学習はわかりやすいですか」



設問3「タブレットを使った学習は、自分が思ったことや考えたことを伝えやすいと思いますか」



【結果】

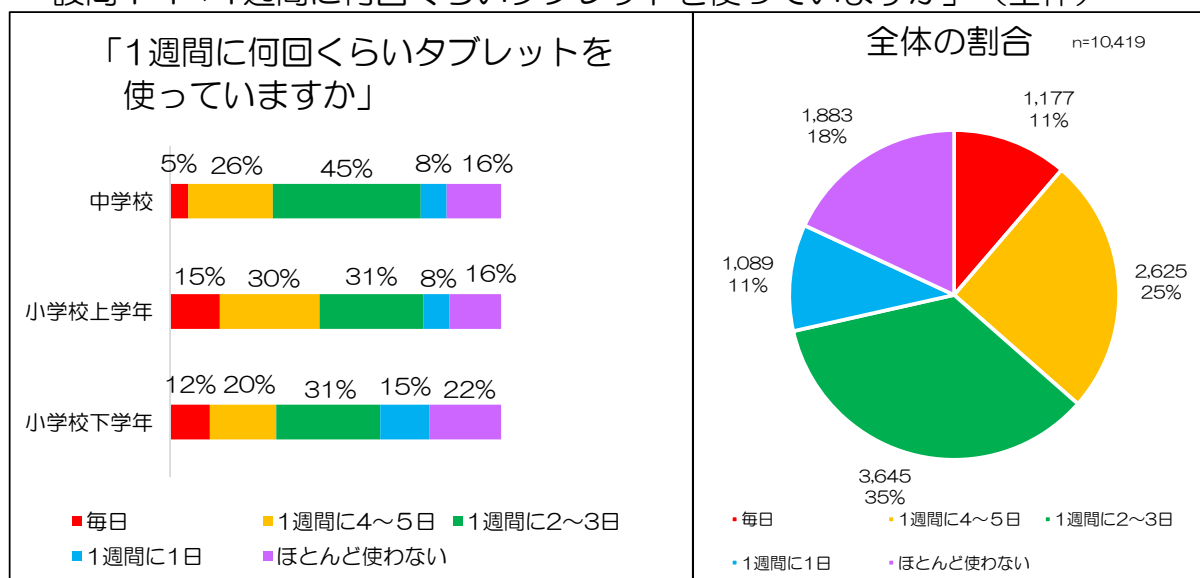
設問1の結果から、タブレットを用いた学習が93%の児童生徒の学習意欲の向上に繋がっていることがわかる。「楽しくない」「あまり楽しくない」と回答している児童生徒は全体の7%で、その中で小学校上学年以上が約8割を占めていることがわかる。

設問2の結果から、タブレットを用いた学習は学習理解につながっていると感じている児童生徒が92%に上っていることや、設問3の結果から81%の児童生徒が学習中に自分の意見が伝えやすくなったことがわかる。このことから、学習参加の向上が予想され、学習理解の向上にも結びついていることが考えられる。

これらの結果から、タブレットを用いた学習の効果は大きく、学習においてタブレットを適切に使用することで、学習参加しやすくなるということが考えられる。

2. タブレットの使用頻度

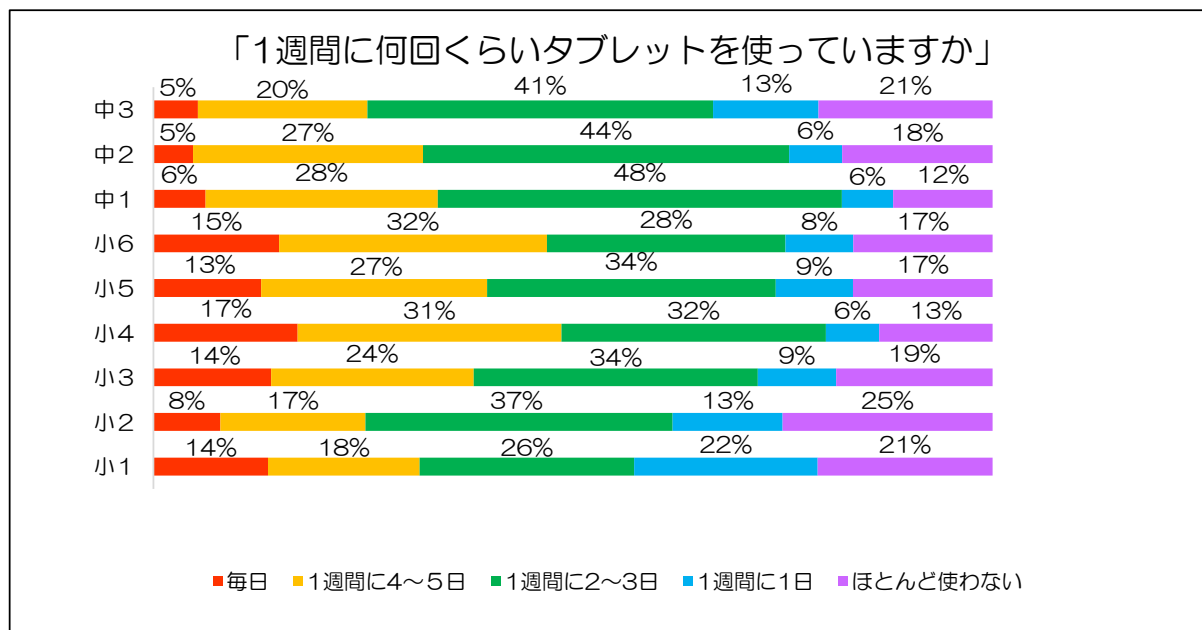
設問4-1 「1週間に何回くらいタブレットを使っていますか」（全体）



【結果】

学習に対しての効果は設問の1～3で明らかになったが、学級でどれくらい学習にタブレットを用いているかを調査すると、週に2～3日が全体の割合で35%と最も多く、使用率が高いとは言えないが、タブレット導入初年度としては、探りながら学習に組み込んでいることはわかる。一方、週に1日以下の学級が約29%あることから、全ての学級においてタブレットを使用した学習が行えていない可能性も示唆された。

設問4-2 「1週間に何回くらいタブレットを使っていますか」（学年別割合）



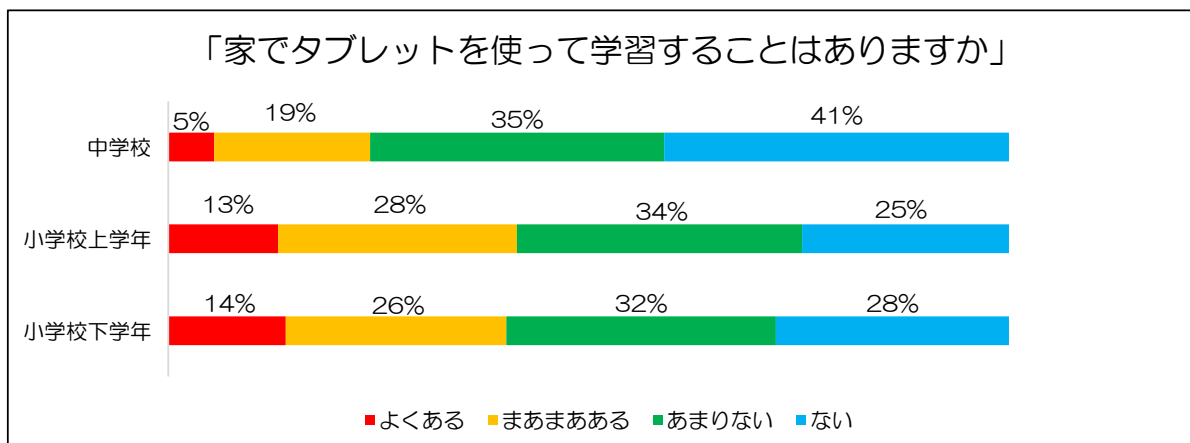
【結果】

全体で週に1日以下の学級が約29%あったことから、タブレットの使用実態を学年別にして比較した。小学校3年から中学校2年までは大きな差はなく、約7割以上が週に2~3日は学習にタブレットを用いていることがわかる。タブレットの使用率が週に1日以下が3割以上なのは小学校低学年と中学校3年生である。中学校3年生は受験に向けての動きが大きくなること、今回のアンケートが受験時期であったことなども含めて、タブレットの使用頻度が低くなったことが考えられる。また、小学校低学年の使用率の低さは、準備の大変さや学習内容がタブレットを使いづらいものである可能性も考えられる。

中学校は教科担任制であるため、タブレットの使用率が教科によって違う可能性が考えられる。今回の調査では教科ごとの質問は行っていないため、今後調査を行う際には新しい視点として考える必要がある。

3. 家庭におけるタブレットの使用頻度と課題について

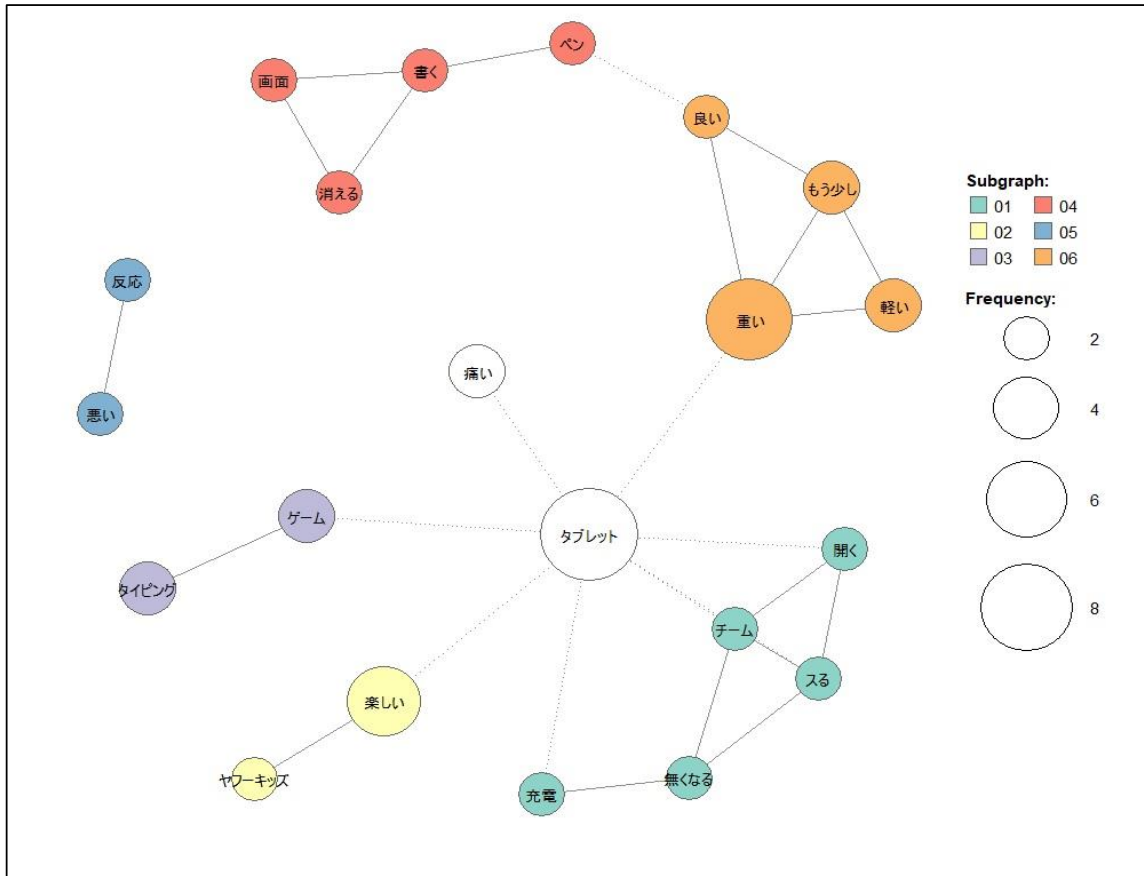
設問5 「家でタブレットを使って学習することはありますか」



【結果】

小学校では約6割が、中学校では76%が家庭でのタブレット学習は行っていないことがわかる。総合教育センターにおいては、タブレットの持ち帰り自体は推奨しているが、持ち帰りからの家庭学習においては次年度以降の課題としているため、本年度は現状を把握し、次年度以降の学びに繋げていきたいと考えている。

設問6-1「タブレットのことでおはなししたいことはありますか」(小学校下学年)



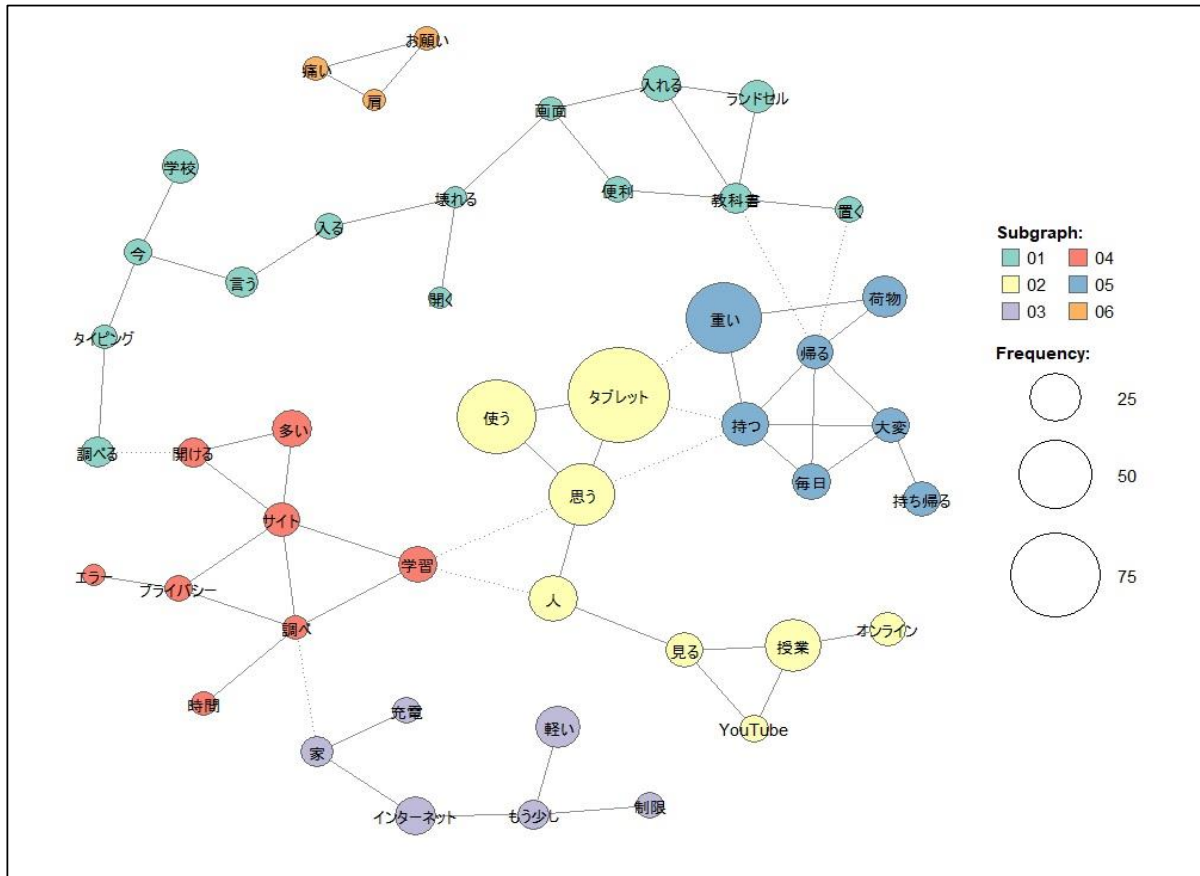
【結果】

小学校下学年の児童のタブレットについて伝えたいことは意見が少なかった。その中で多かったのがタブレットが重く、軽くしてほしいという意見が7名。他には不具合の相談が多かった。設問7と比較しても、小学校下学年の児童はタブレットの重さを気にするよりも、タブレットの不具合への対応や自分ができるようになったことに対する感想が多かった。

※共起ネットワーク

自由記述に書かれた文章から、頻出単語を抜き出し、関係性のあるものを線で結んでいる。実線ほど結びつきが強く、輪が大きいほど頻出回数が増えている。

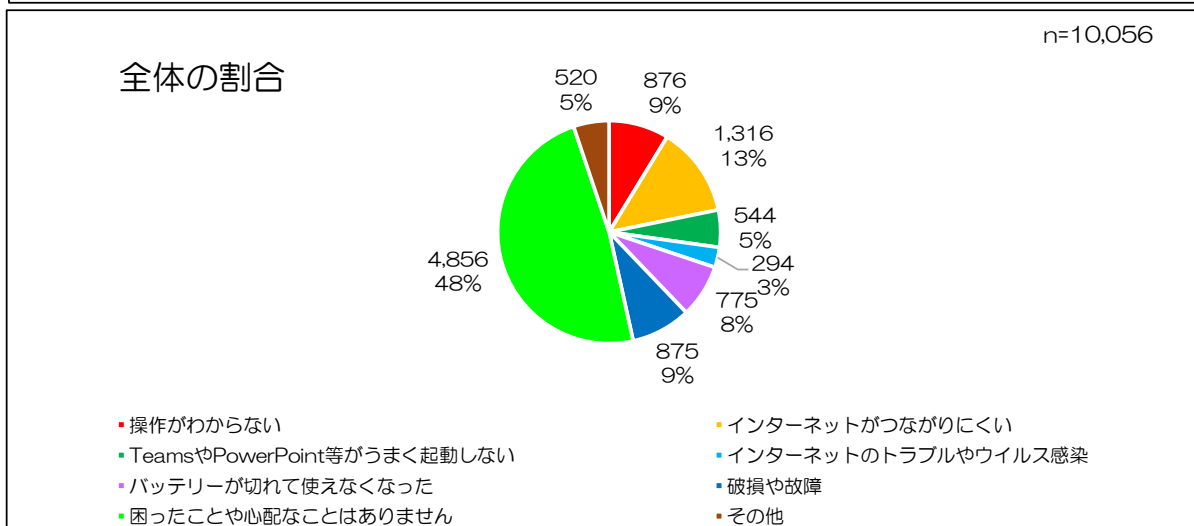
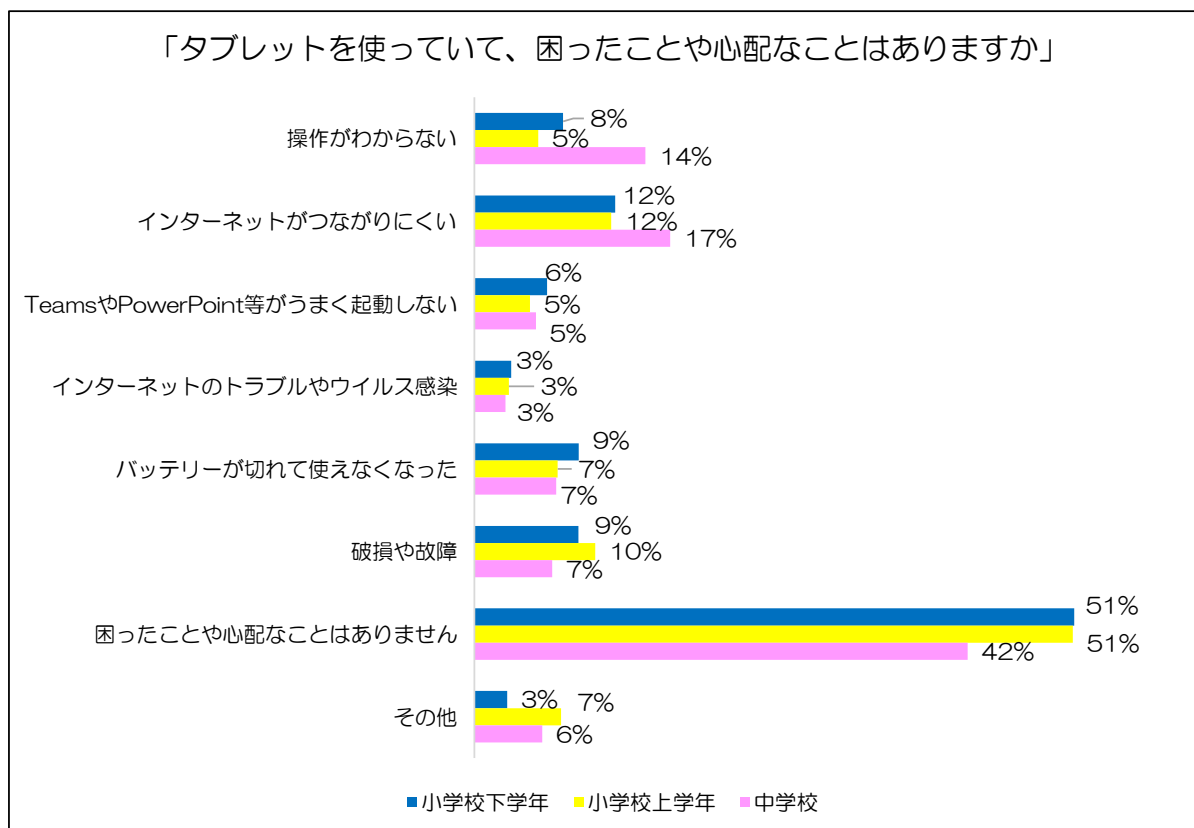
設問6-2「タブレットのことに伝たいことはありますか」(小学校上学年)



【結果】

設問7で「荷物が重くなった」と回答した児童2,679名いる中で、タブレットが重いという意見を出している児童は54名で、2,625名は問題と感じていない。確かに、図からタブレットが重いことで、毎日持ち帰ることに負担を感じている児童がいることはわかる。同時に、重さよりも教科書を置いて帰りたい、ランドセルに入りづらいといった方向性の悩みがあることもわかる。持ち帰りについては様々な角度からの検討が必要になってくると思われる。

設問8 「タブレットを使っていて、困ったことや心配なことはありますか」



【結果】

小・中学校を通して、困ったことや心配なことはないと回答する児童生徒が多く（小学校51%、中学校42%）小学校では半数の児童が困っていないと回答している。次いでインターネットにつながりにくい点が小・中学校で共通してあげられていることから、アンケートを精査し、特定の環境で通信の不具合が起こっていないか確認する必要がある。中学生が小学生と違ったのは、3番目に「操作の仕方がわからない」という心配事が上がったことである（14%）。使用頻度の問題なのか、教科担任制によってじっくり使用するという時間確保の問題なのか、今後精査していく必要がある。このためか、中学校の困ったことは小学校よりも割合として多くなっている。

4. 保護者に行ったアンケートの結果

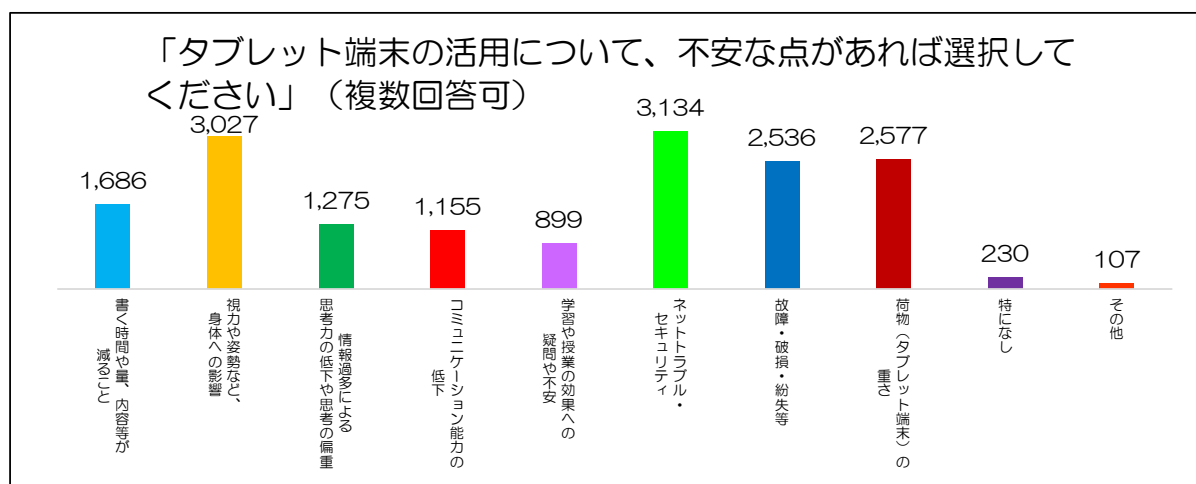
設問1「お子様の学年を教えてください」

対象	回答数	在籍数	回答割合
小学校下学年	2,240	4,540	49%
小学校上学年	1,992	4,562	44%
中学校	1,385	4,073	34%
合計	5,617	13,175	43%

【結果】

回答数の高低はあるとして、今回のアンケートに回答した保護者のタブレットに関する関心は高いことが考えられる。母集団も5,600人を超えていることから、統計学上は十分に有効な回答となっていることが推察される。

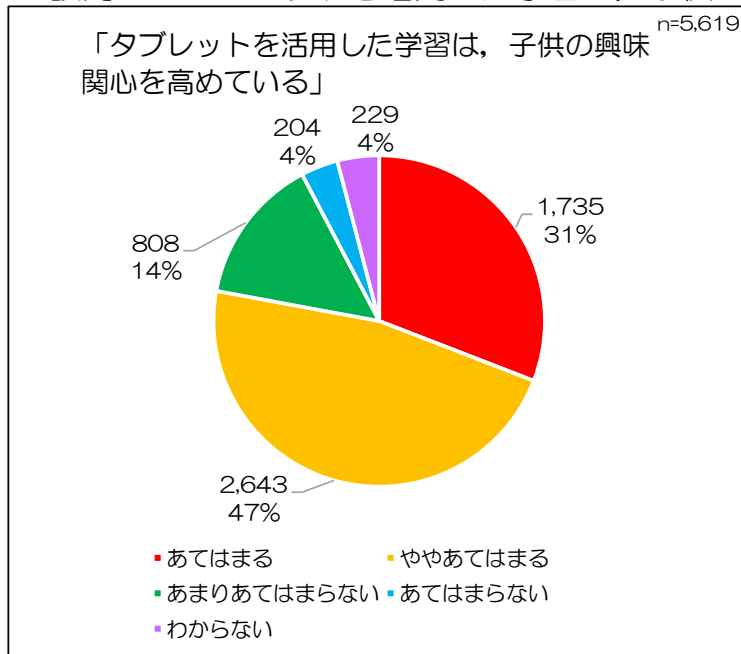
設問2「タブレット端末の活用について、不安な点があれば選択してください」(複数回答可)



【結果】

最も関心が高かったのはネットトラブル・セキュリティで、次いで児童生徒の身体への影響であった。まずは危険にさらされないようにという考えが読み取れる。第3に不安視されているのが、タブレットが持ち帰りになっていることに対する荷物の重さである。心理的な不安と合わせて子供の身体的な不安が強いことが示唆される。また、児童生徒と比較した時、「特になし」が非常に少ない。保護者としての心配の高さが伺える。安心安全な学校づくりのためにも、これらの不安に対する適切な手立てや支援を行っていくことがもとめられている。不安の第4に上がっている故障や破損等については、原則すべて保険の対象となっている。

設問3 「タブレットを活用した学習は、子供の興味関心を高めている」

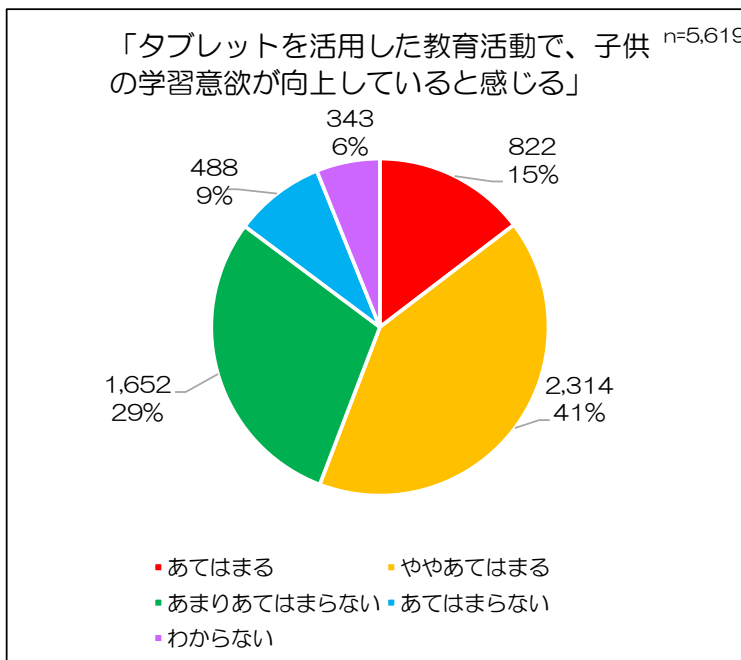


【結果】

タブレットを学習に用いることで子供の興味関心が向上するだろうと考えている保護者の割合は高く、78%となっている。これは自宅でもタブレットを使用している、またはタブレットに関する話題が出ていることが考えられる。

約8割の家庭でタブレットによって子供の興味関心が向上したことが確認されている反面、約2割の家庭ではタブレットに対して子供の興味関心を高める要因にはなっていないとの回答が出されている。この約2割の家庭では家庭におけるタブレット学習の有用性が感じられるような使用がなされていないことが考えられるため、今後の家庭学習における課題として受け止めていく必要がある。

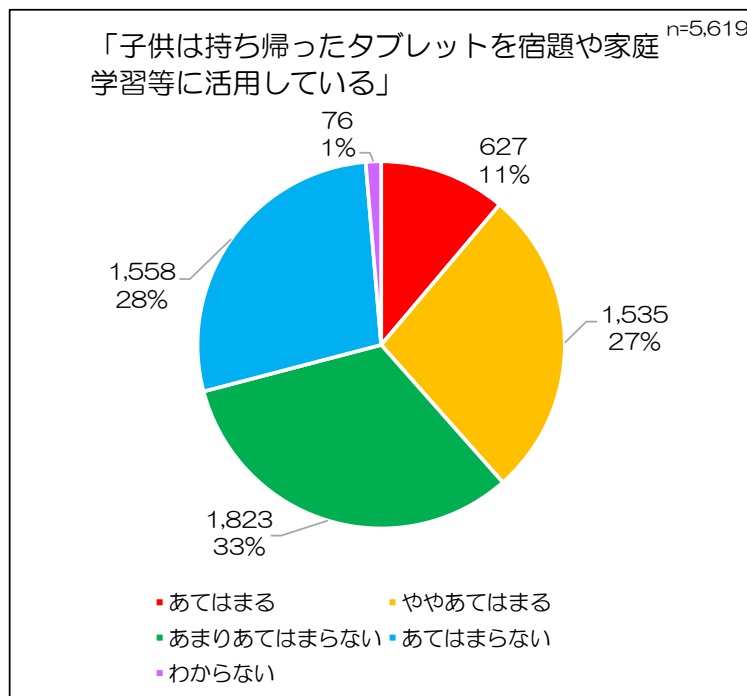
設問4 「タブレットを活用した教育活動で、子供の学習意欲が向上していると感じる」



【結果】

子供の学習意欲が向上していると感じている保護者は56%で、約半数の保護者は学習意欲が向上したと受け止めている。反面38%の保護者は向上したとは感じていないことから、子供の学習意欲の向上のために、タブレットの有用な使用方法を学校現場から発信していく必要がある。

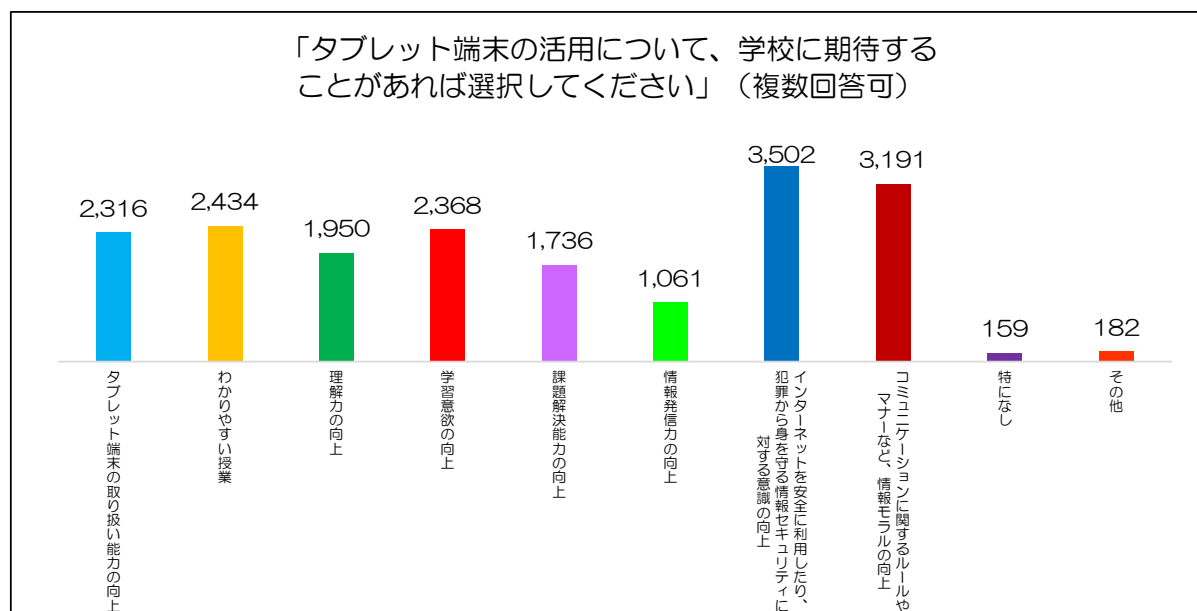
設問5 「子供は持ち帰ったタブレットを宿題や家庭学習等に活用している」



【結果】

通信環境が整っていない家庭の状況を鑑み、現在は総合教育センターより通信環境を用いた宿題の推奨は行っていない。そのため、通信環境に縛られない宿題を工夫して出している学校が約4割存在していることがわかる。次年度以降は経済的な理由でWiFi環境の整っていない家庭への支援体制の充実に努めていくことから、家庭での活用が増加していくものと見込んでいる。

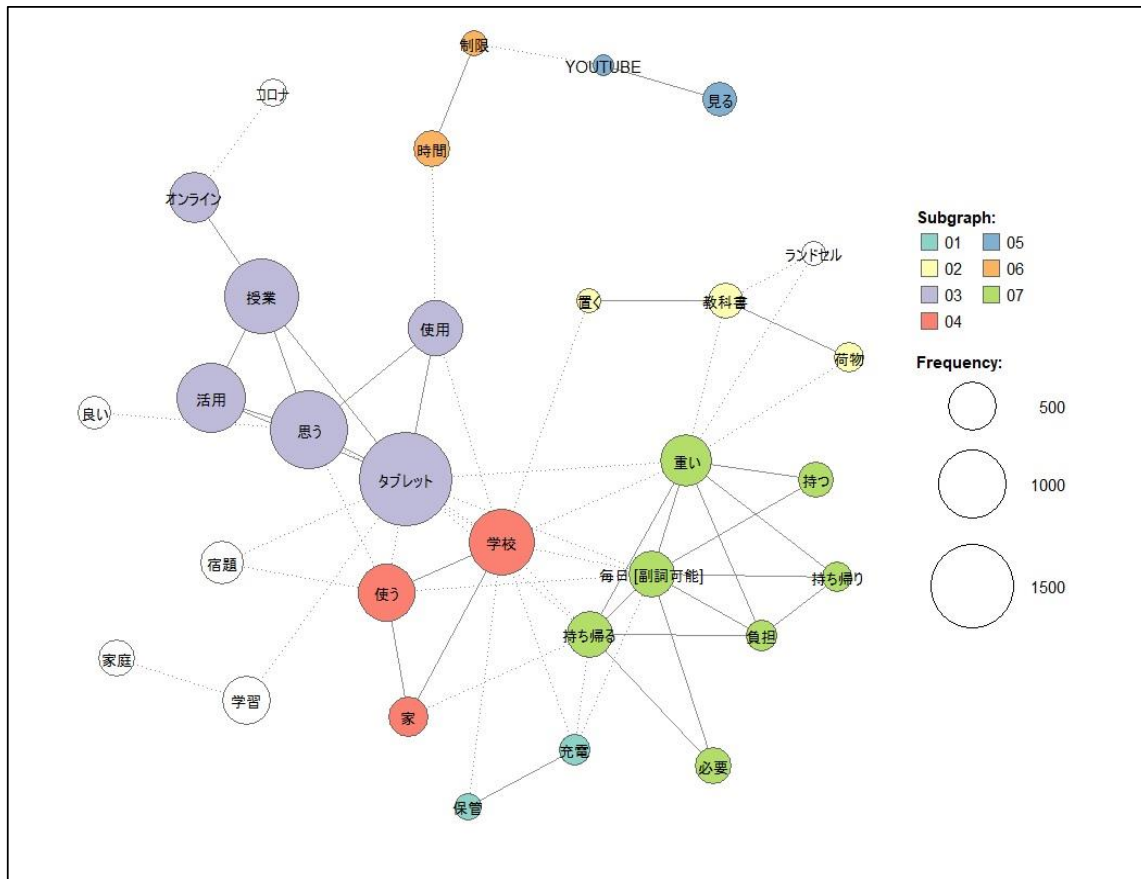
設問6 「タブレット端末の活用について、学校に期待することがあれば選択してください」(複数回答可)



【結果】

最も多かった意見は情報セキュリティ、次いで情報モラルについてであった。情報化社会にあって、小・中学生の段階から情報の取り扱いや身の守り方など、情報との関わり方について、保護者は意識の高さを示している。

設問7「タブレットの活用について何かありましたら記入してください」



【結果】

保護者の意見を共起ネットワークで表した。タブレットの授業における更なる活用を望む声が多く、現在の活用には満足していないことが推察される。また、家で使うよりも学校で使うことや、家庭への持ち帰りはタブレットが重く、毎日の持ち帰りは負担であることなどが読み取れる。タブレットが重いと感じる意見に合わせて、教科書を学校に置いておきたいという意見もあり、現在行っている「置き勉」の状況確認と併せて、さらなる対策を計画的に考えていく必要がある。

【成果と課題・今後の取組】

<成果>

- ①タブレットを用いた学習では児童生徒の意欲関心が高まった。
- ②タブレットを用いた学習では児童生徒の学習理解が深まった。
- ③タブレットを用いた学習では児童生徒が思考した内容を、伝え方の得手不得手に関わらず伝えやすいことがわかった。
- ④タブレットを用いた学習では保護者も児童生徒の学習意欲が高まったと感じていることがわかった。

<課題>

- ①タブレットの使用頻度に学年間でも差が表れていることがわかった。
- ②タブレットについて持ち帰り時の重さをあげた児童生徒が複数名いた。
- ③保護者が情報モラル教育の充実について求めていることがわかった。
- ④自由記述において視力などへの影響を心配する声が多く寄せられた。

<今後の取組>

- ① 教育委員会では、ICT支援員やICT学習指導員を配置し、タブレットの活用が進むよう支援をしてきた。職員アンケートからも一定の効果を得ていることが伺える。特にICT学習指導員は、延べ252回の授業に参加し、活用について指導助言を行い、各校の効果的な実践例をまとめ、市内に広めることができた。各学校においてもICT推進委員会を立ち上げ校内研修を実施したり、学年会や教科部会で活用を紹介しあうといった推進をしている。

次年度については「習志野市のICT活用を推進したICT学習指導員の継続」「操作に不安を抱える教員を対象とした、タブレットの基本操作」「教科ごとの活用事例を学べる先進的な実技研修を実施」「各学校内でのOJTが進むように、ICT活用の推進を担う教員が講師として操作の基本研修を実施する」など一層の活用を進め、苦手意識をもつ教員が安心してタブレットを授業で活用していけるよう取り組んでいく。

- ② 学校では、登下校時の荷物の重さ対策として、多くの学校で宿題以外の教科書やノート等を置いて帰ってよいことになっており、およそ1.0Kg～2.5Kgの削減となっている。タブレット端末の重量が1.4Kgであることから、タブレット端末導入によって、持ち帰る荷物が重くならないように各校で取り組んでおります。

設問7から「荷物が重たい」と回答している割合が最も少なかったのが小学校下学年であったことから、小学校下学年に優先して行った「置き勉」が一定の効果を上げていることが伺える。

今後は小学校上学年、中学校においても、教科書やタブレットだけでなく全体の荷物の重さについて配慮し、更なる取組を進めていく。

- ③ 情報モラル教育については、小学校では各学級でインターネットの使い方を指導し、中学校の取組では、生徒会でICT委員会を設置し、生徒自身が使い方などを話し合い発信したり、講師を招聘してネットトラブルや適切な使い方について学習したりするなど、各学校の取組がみられる。また、発達段階に応じて道徳の授業を通し、情報モラル教育を実施している。
- 次年度についても、日常的に情報モラルについての指導を行い、ネットいじめ防止の観点も取り入れつつ、安全安心なタブレットの活用ができる学校作りを行っていく。そのために、早い段階で総合教育センターより適切な情報の発信を行っていく。
- ④ タブレットの使用時間や使用目的を明確にし、過剰に使用しすぎないように配慮していく必要がある。タブレットの適切な活用や健康への注意を発信していく。
- ⑤ 本調査を今後の取組の参考にしつつ、必要に応じて更なる調査を行っていく。